

千鳥

鈴木三重吉

青空文庫

千鳥の話は馬喰ばくろうの娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆むしろを敷いてしよんぼりと坐っている。干し列べた平莖ひらぐきには、もはや糸筋ほどの日影もささぬ。洋服で丘あかを上つてきたのは自分である。お長は例の泣きだしそうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして襷たすきがけの真似まねは初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。頤あごで奥うしろを指して手枕てぶきをするのは何のことか解らない。藁わらでたばねた髪かみの解ほつれは、かき上げてもすぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出てくるものがないから勢はずみがない。廊下へ出て、のこのこ離れの方へ行ってみる。麓ふもとの家で方々に白木綿

を織るのが轡くつわむし虫が鳴くように聞える。廊下には草花の床とこが女帯ほどの幅で長く続いている。二三種の花が咲いている。水仙の一と株に花床が尽きて、低い階段を拾うと、そこが六畳の中二階である。自分が記念に置いて往った摺絵すりえが、そのままに仄ほのぐら暗く壁に懸っている。これが目につくと、久しぶりで自分の家うちに帰つてきでもしたように懐なつかしくなる。床の上に、小さな花瓶に竜胆りんどうの花が四五本挿してある。夏二た月の逗とうりゆう留の間、自分はこの花瓶に入り替りしおらしい花を絶やしたことがなかった。床の横の押入から、赤い縮ちりめん緬の帯上げのようなものが少しばかり食はみだしている。ちよつと引つ張つてみるとすうと出る。どこまで出るかと続けて引つ張るとすらすらとすっかかり出る。

自分はそれをいくつにも畳んでみたり、手の甲へ巻きつけたりしていじくる。後には頭から頤あごへ掛けて、冠かんむりの紐ひものように結んで、垂れ下ったところを握ったまま、立膝になつて、壁の摺絵を見つめる。「ネイシヨンス・ピクチュア」から抜いた絵である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のように滲にじんでいる。目を細くして見ていると、女はだんだん絵から抜けでて、自分の方へ近寄つてくるように思われる。

すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐つている。きちんとした嬢さんである。しとやかに挨拶をする。自分はまだついて冠を解き捨てる。

婦人は微笑ほほえみながら、

「まあ、この間から毎日毎日お待ち申していたんですよ」という。「こんな不自由な島ですから、ああはおっしやつてもとうとお出でくださらないのかもしれないと申しまして、しまいにはみんなで気を落していましたのでございますよ」と、懐かしそうに言うのである。自分は狐にでもつままれたようであつた。丘の上のひと一つ家の黄たそがれ昏やに、こんな思いも設けぬ女の人ののこりと現れて、さも親しい仲のように対してくる。かつて見も知らねば、どの誰という見当もつかぬ。自分はただもじもじと帶上を畳んでいたが、やつと、

「おばさんもみんな留守なんだそうですね」とはじめて口を聞く。「あの、今日は午過ぎから、みんなで大根を引きに行ったんです

の」

「どの畠へ出てるんですか。——私ちよつと行つてみましょう」
「いいえ、もうただ今お長をやりましたから大騒ぎをして帰つていらつしやいますわ」

「さつき私は誰もいないのだと思つて、一人でずんずんここへ上つてきたんでした」と言つて、お長が手枕の真似をしたことを胸に浮べる。女の人は少し頭痛がしたので奥で寝^{やす}んでいたところ、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起してくれたのだと言う。

「もう何ともございません」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出てきたものらしい。ややあつて、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか」と聞く。

自分の事は何でもすつかり知っているような口ぶりである。

「どうもやっぱり頭がはきはきしません。じつは一年休学することにしたんです」

「そうでございますってね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じていらっしやるんですよ。今度またこちらへお出でになることになりましたから、どんなにお喜びでしたかしれません。……考えると不思議な御縁ですわね」

「妙なものですね。この夏はどうしたことからでしたか、ふところらへ避暑に来る気になったんですが、——私はあまり人のざわつくところは厭だもんですから。——その代り宿屋なんぞのないということをはじめから承知の上なんでしたけれど、さあ、船か

ら上つてそこらの家へ頼うちんでみると、はたしてみんな断つてしま
うでしょう。困つたんですよ」

婦人は微笑む。

「それでしかたがないもんだから、とうとのこのこ役場へやつて
行つたんです。くるくる坊主です、ねここの村長は」

「ええ、ほほほ」

「そしたらあの人が親切に心配してくれたんです」

「そしてこの小母さんに、私は母というものがないんだから、
こんな家へ置いてもらつたらいいのですが、そうおつしやつ
たのですってね」

「そうでしたかなあ。とにかく小母さんを一と目見るとから、何

かしら懐しくなつたんです」

「そんなにおつしやつたものですから、小母さんもしおらしい方だと思つて、お世話をする気になつたんですつて」

「私は今では小母さんが生みの親のように思われるんですよ。私の家にいたつて何だか旅の下宿にでもいるような気がするんですもの」

「小母さんも青木さんはあたしの内証の子なんだかもしれないなんて冗談をおつしやるんですよ」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたというのはもう直つたのですか」

「ええただナイフでちよつと切つたばかりなんですから」

二人はこのような話をしながら待つている。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌う。

障子を開けてみると、麓の蜜柑畑が更紗の模様のもようである。白手拭を被った女たちがちらちらとその中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹続いて出る。やはり女が引いている。向いの、縞のようになつた山畠に烟が一筋揚つている。焰がぼろぼろと光る。烟は斜に広がつて、末は夕方の色と溶けてゆく。

女の人も自分のそばへ寄つて等しく外を見る。山畠のあちらこちらを馬が下りる。馬は犬よりも小さい。首を出してみると、庭の松の木のはずれから、海が黒く湛えている。影のごとき漁船が後先になつて続々帰る。近い干潟の灰白い砂の上に、黒豆

を零こぼしたようなのは、鳥の群が下りているのであろうか。女の人
の教える方を見れば、青松葉をしたたか背負った頬冠りの男が、
とことこと畦あぜみち道を通る。間もなくこちらを背にして、道につい
て斜に折れると思うと、その男はもはや、ただ大きな松葉の塊かたまりへ
股引の足が二本下ったばかりのものとなって動いている。松葉の
色がみるみる黒くなる。それが蜜柑畑の向うへはいつてしまうと、
しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間谷間の黒みから、
だんだんとこちらへ迫ってくる黄たそがれ昏くれの色を、急がしい機はたの音が
招き寄せる。

「小母さんは何でこんなに遅いのでしょね」と女の方は慰める
ようにいう。あたりは見るうちに薄暗くなる。女の方がちよつと

出て行つて、今度帰つて坐つた時には、向き合ひになつてももう面輪おもわが定かに見えない。

女の人は、立つて押入から竹洋灯ランプを取りだして、油を振つてみて、袂から紙を出して心しんを摘む。下へ置いた笠に何か書いた紙切れが喰つついてゐる。読んでみると章坊の手らしい幼い片仮名で、フジサンガマタナクと書いてある。

「あら」と女の人は恥かしそうに笑つてその紙を剥はがす。

「章ちゃんがかんな悪いたずら戯をするんですわ。嘘ですよ、みんな」と打消すようにいう。

「何の事なんです、これは」

「ほほほ」

「フジサンというのは」

「あたしでございます」

「ああ、お藤さんとおっしゃるんですか」

「はい」と藤さんは微笑みながら、立って押入れを探す。

藤さんという名はこうして知ったのである。

「そしてあなたが何でお泣きになったんです？」

「いいえ、嘘ですの、そんなことは」

「燐寸マツチを探していらっしやるんですか。私が持っています」

「あら、冗談なのでございますわ。あれは章ちゃんか……」と勘

違いをしている。ポケットから燐寸を出して洋灯ともを点すと、

「まあ、恐れ入ります」と藤さんは坐る。灯とも火しびに見れば、油絵

のような艶あでやかな人である。顔を少し赤らめている。

「あしが一番あん」と章坊が着物を引っ抱えて飛びだすと、入れ違いに小母さんがはいつてきて、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これをあげましょう」と下した締じめを解く。それを結んで小暗い風呂場から出てくると、藤さんが赤い裏の羽織ひろを披ひけて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか」

「でもほかにはないんですもの」と肩へかける。

「それでも洋服とは楽でがんしょうがの」と、初はつやが焜こんろ炉ろを煽あおぎ

ながらいう。羽織は黄八丈である。藤さんのだということは問わ
ずとも別っている。

「着物が少し長いや。ほら、踵かかとがすっかり隠れる」と言うのと、

「母さんのだもの」と炬燵こたつから章坊が言う。

「小母さんはこんなに背が高いのかなあ」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病気をしな
すもんじゃけに」と初やが冗談からをいう。

「女は腰のところを下帯で繫からげて着るんですから」と言つて、藤
さんはそばから羽織の襟を直してくれる。

「なぜそうするんでしょう」

「みんなそうするんですわ。おや、羽織に紐がございませんわね」

「いいえけっこう」というと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいいこと」と言いさま、きゆうにばたばたとほげしく煽ぎだす。

「まあ」と藤さんは赤い顔をしている。

蜜柑箱を墨で塗って、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの鐘詰からの殻はを嵌めて、それを踏台の上に乗せて、上から風呂敷をかけると、それが章坊の写真機である。

「またみんなを玩具おもちゃにするのかい」と小母さんが笑う。この細工は床屋の寅吉に泣きついてさせたのだという。章坊は、

「兄さんを写してあげるんだから、よう、炬燵から出てください

よ」と甘えるように言うかと思うと、

「じきです。じき写ります」と、まじめに写真やのつもりでいる。

「兄さんは炬燵へ当たってる方がうまく写るよ」

「だって姉さんが邪魔をしてるんだもの」と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さんぐずぐずしてると背中が写ってしまいますよ」

「はいはい」と、藤さんは笑いながら自分の隣へ移る。

「兄さん、もつと真っ直ぐ」

「私の顔が見えるの？」

「見えるとも、そら笑ってらあ。やあい」

がたがたと箱を揺ぶる。やがてもったいらしく身構えをして、

「はい、写しますよ」とこちらを見詰める。

「あら、目を閉つぶつてるものがあるものか。……さ、写りますよ。

……ただ今。はいありがとう」と手に持った厚紙の蓋ふたを罐詰かぶへ被せると、箱の中から板切れを出して、それを提さげて、得意になつて押入の前へ行く。

「章ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへはいるもんじやないよ」と小母さんが止めると、

「だつてお母さん。写真を薬でよくするんじやありませんか」と泣きそうな顔をする。

「それよりか写真屋さん。一昨日おとといかしら写したあたしの写真はいつでもできるんですか」と藤さんが問う。小母さんも、「私ももう五

六度写つたはずだがねえ。いつできるんだろう。まだ一枚もくれないのね」と突つ込む。それから小母さんは、向いの地方じがたへ渡つて章坊と写真を撮とつた話をする。章坊は、

「今度は電話だ」と言つて、二つの板ボード紙がみの筒を持つて出てくる。筒の底には紙が張つてあつて、長い青糸が真ん中を繫つないでいる。勧工場かんこうばで買ったのだそうである。章坊は片方の筒を自分に持たせて、しばらく何かしら言つて、

「ね、解つたでしよう？」という。

「ああ、解つたよ」といい加減に間まを合あわしておくと、

「万歳」と言つてにこにこして飛んできて、藤さんを除どけて自分の隣りへあたる。

「よ。姉さんもだよ」という。

「よしよし」

「何の事なんです」と藤さんは微笑む。

「今電話がかかりましてね、……」

「ああ今言っちゃいけないんだよ兄さん。あれは姉さんには言われないんだから」

「何でしょう。人が悪いのね」

このようなことを言っているところへ、初やがきつねまんじゅう狐 饅頭 を買つて帰ってくる。小提ぢょうちん灯 を消すと、蠟燭ろうそく から白い煙がふわふわと揚あがる。

「奥さま、今度の狐もやっぱり似とりますわいの」と言つてげら

げらと初やが笑う。

饅頭を食べながら話を聞くと、この饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被った張子の狐が立たせてあつた。その狐の顔がそこうちの家の若い女房におかしいほどそっくりなので、この近在で評判になつた。女房の方では少しもそんなことは知らないでいたが、せんだつて先達ある馬方が、饅頭の借りを払つたとか払わないとかでその女房に口論をしかけて、

「ええ、この狐め」

「何でわしが狐かい」

「狐じゃい。知らんのか。鏡を出してこの招牌かんばんと較べてみい。

間拔けめ」

こういったようなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主はこの辺では珍らしい捌さばけた男なんだそうで、それは今ごろ始つた話じゃないんだ。己の家の饅頭がなぜこんな名高いのだと思う、などとちやらかすので、そんならお前さんはもう早くから人の悪わるくち
口も聞いていたのかと問えば、うん、と言つてすましている。

女房はわつと泣きだして、それを今日まで平気でいたお前が恨うらめしい。畢ひつき 竟ようわしをばかにしているからだ。もうこれぎり実家さとへ帰つて死んでしまふと言つて、箆たんす笥すから着物などを引つ張りだす。やがて二人で大立廻りをやつて、女房は髪を乱して向いの船頭の家へ逃げこむやら、とうと面倒なことになつたが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊りの晩に袖を引き

合めおといからの夫妻じゃないか。さあ、仲直りに二人で踊れよおい、と五合ばかり取ってきた。その時の女房との条約もとづに基いて、店の狐は翌日から姿を隠してしまった。ほかの狐が箱にはいつて城下の人形屋から来て、ふたたび店に立ったのはついこの間の事である。今度のは大きさもいたち黴ぐらいしかないし、顔も少し趣を変えるように注文したのであろうけれど、

「なんぼどのような狐をこしら拵えてきたところで、お孝ちゃんの顔が元のままじゃどうしてもだめがanusわいの。へへへへ」と、初やは、やっと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さんももう先達も聞いたから、今夜はそんなにおかしくはないと言つたけれど、それでもやはりはじめてのように笑っていた。

話が途絶^{とだ}える。藤さんは章坊が蒲団へ落した餡^{あん}を手の平へ拾う。影法師が壁に写っている。頭が動く。やがてそれがきちんと横向きに落ちつくと、自分は目口眉毛を心でつける。小母さんの臂^{うで}がちよいちよい写る。簪^{かんざし}で髪の中を搔^かいているのである。裏では初やが米を搗^つく。

自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寝る。

枕が大きくて柔かいから嬉しいと言うと、この夏にはうつかりしていたが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいう。藤さんはこの枕を急いで拵^とえてから、あだに十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲団の裾すそを叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐つて夜着の袖をも押えてくれる。自分は何だか胸苦しいような気がする。やがてあちらで藤さんが帯を解くけはい気色けいしきがする。章坊は早く小さないびき軒になる。自分は何とはなしに寝入ってしまうのが惜しい。

「ね、小母さん」とふたたび話しかける。

「え？」と、小母さんは閉じていた目を開ける。

「あの、いったい藤さんはどうした人なんです？」と聞くと、
「なぜ？」と言う。

聞いてみると、この家うちが江田島の官舎くわんしゃにいた時に、藤さんの家と隣り合せだったのだそうである。まだ章坊も貰もらわない、ずっと

先の事であつたし、小母さんは大変に藤さんを可愛がつて、後には夜も家へ帰すよりか自分の側へ泊らせる方が多いくらいにしていた。はじめそこへ移つてきた翌あくる日であつたか、藤さんがふと境の扇骨かなめがき木垣の上から顔を出して、

「小母さま。今日は」と物を言いかけたのが元であつた。藤さんが七つ八つにすぎぬころであつたろう。それから四五年してこの主人が亡くなつて、小母さんはこちらへ住居をきめることになつた。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと恋しがつて、今日まで月に一二度、手紙を欠かしたことはない。藤さんの家は今佐世保にあるのだそうで、お父さんは大佐だそうである。

「それでは佐世保からはるばる来たんですか」

「いいえ、あの娘こだけは二た月ばかり前から、この対岸むかいにいるんです。あなたでも同じおんなですけど、こんなになると、情合はまったく本当の親子と変りませんわ」

「それだのにこの夏には、あの人の話はちよつとも出ませんでしたね」

「そうでしたかね。おや、そうだったかしら」

「そして私の事はもうすっかりあの人に話してあるようですね」

「ふふふそれはあなた、家では何とかいうとすぐあなたの話が出るんですから、あの人だって、まだ見もしないうちからもう青木さん青木さんと言つて、お出でになつてもまるで兄きょうだい妹かなぞ

のように思っているんですもの」と章坊の枕を直してやる。

「さつきもね、初やから、お嬢さんは存外人に恥かしくない方だとかなんとか言ってからかわれたんでしょう。そうするとね、だってあの方はもうよくお知り申してる方なんだものってそう言うんですよ。それでいてまだずいぶん子供のようなところがあるんですからね」

「私だって何だか、はじめて会った人のようには思えませんよ。

——まだ永くとまりゆう逗留するんですか」

「あの娘こですか。そうですね……いったい今度こちらへまいったというのが……」

しまいを欠あくびといっしよに言って、枕へ手を添えたを見ると、小

母さんはその後を言わないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まりこんでしまふ。しばらく待つてみても容易にふたたび顔を出さない。蒲団の更紗へ有明^{ありあけあんどん}行灯^{あかりおぼろ}の灯が朧にさして赤い花の模様がどんよりとしている。

何だか煮えきらない。藤さんが今度来たのはどうしたのだというのか。何かおもしろくない事情があるのであろうか。小母さんは何とか言いかけてひよつくり黙つてしまった。藤さんはどうして九月から家を出ているのか。この対岸^{むかい}のどんな人のところにいるのであろう。

池へ山水の落ちるのが幽^{かす}かに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすやすやと眠っている。大根を引くので疲れたのかもしれない。

ない。小母さんの静かな寝顔をじっと見てみると、自分もだんだんに瞼まぶたが重くなる。

千鳥の話は一と夜明け。

自分は中二階で長い手紙を書いている。藤さんが、

「兄さん」と言っではいつてくる。

「あのただ今船頭こしらが行李を持ってまいりましたよ」という。

「あれは私のです」と言っただまま、やっぱりずんずんと書いて行く。

「それはそうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならぬのでしょう？」

「ええ」

「ではこの押入には、下の方はあたしのものが少しばかりはいつておりますから、あなたは当分上の段だけで我慢してくださいましな」

「……………」

「ねえ」

「ええ」

「まあ一心になつていらつしやるんだわ」という。

ちようど一と区切りついたから向きなおる。藤さんは少し離れて膝を突いている。

「お召し物も来たんでしよう？——では早くお着換えなさいまし

な。女の着物なんか召しておかしいわ」と微笑む。自分は笑って、袖を翳かざしてみる。

「さつきね」と、藤さんは袂たもとへ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これごろんなさい」と、袂たもとの紅絹裏もみの間から取り出したのは、茎くきの長い一輪の白い花である。

「このごろこんな花が」

「蒲公英たんぽぽですか」と手に取る。

「どこで目つけたんです？ たった一本咲いてたんですか」

「どうですか。さつき玉子を持ってきた女の子がくれてったんですの。どこかの石垣に咲いていたんだそうです。初やがね、これはこのごろあんまり暖かいものだから、つい欺だまされて出てきたん

ですって」

返した花を藤さんは指先でくるくる廻している。

「本当にもう春のようですね、こちらの気候は」

「暖いところですね」

自分はおくもくと日のさした障子を見つめて、
陽炎かげろうのような
心持になる。

「私ただ今お邪魔じゃございませんか」

「何がです？」

「お手紙はお急ぎじゃないのですか」

「そうですね。——郵便の船は午ひるに出るんでしたね」

「ええ。ではあとですぐ行李をこちらへ運ばせますから」と、藤

さんは張合がなさそうに立って行く。

「あ、この花は？」

「え？」と出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ」

藤さんが行ってしまったあとは何やら物足りないようである。

たんぽぽを机の上に置く。手紙はもう書きたくない。藤さんがもう一度やってこないかと思う。ちぎった書き崩しを拾って、くちやくちやに揉んだのを披ひろげて、皺しわを延ばして畳んで、また披ひろげて、今度は片端から噛み切っては口の中で丸める。いつしかいろいろの夢を見はじめる。——自分は覚めていて夢を見る。夢と自分で名づけている。

馬の鈴が聞えてくる。女が謡うのが聞える。

ふと立って廊下へ出る。藤さんが池のそばに踞しゃがんでいて、

「もうおすみになつて？」と声をかける。自分は半煮えのような返事をする。母屋おもやの縁先で何匹かのカナリヤがやつきさえすに囀り合っている。庭いっばいの黄色い日向は彼らが吐きだしているのかと思われる。

「ちよつといらつしてごらんなきいな。小さな鮒ふなかしらたくさんいますわ」と、藤さんは眩まぶしそうにこちらを見る。

「だって下駄がないじゃありませんか」

「あたしだって足袋のままですわ」

自分もそれなり降りて花床またを跨ぐ。はかなげに咲き残った、何

とかいう花に裾すそが触れて、花弁はなびらの白いのがはらはらと散る。庭は一面に裏枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢ひとむら生えている。女松の大きいのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然のままを残したのである。藤さんは、水のそばの、苔こけの被った石の上に踞すわんでいる。水ぎわにちらほらと三葉四葉ついた櫛はせの実生えが、真赤な色に染つている。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたように痺しびれを打つ。「おや、みんな沈みました」と藤さんがいう。自分は、水を隔へだてて斜に向き合つて芝生に踞すわむ。手を延ばすなら、藤さんの膝かざにかろうじて届くのである。水は薄黒く濁つていれど、藤さんの鬚かざす袂たもとの色を宿している。自分の姿は黒く写つて、松の幹の影に切ら

れる。

「また浮きますよ」と藤さんがいう。指すところをじつと見守つていると、底の水苔を味噌汁のように煽おだてて、幽かな色の、小さな鮎子がむらむらと浮き上る。上へ出てくるにつれて、幻うつから現へ覚めるように、順々に小黒い色になる。しばらくいつしよに集つてじつとしている。やがて片端から二三匹くずつ繰りだして、列を作つて、小早に日の当る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被かぶつた水草の葉が、泥へ彫刻したようになっている。ややあつて、ふと、鮎子の一隊が水の色とまぎれたと思うと、底の方を大きな黒いのがうじやうじやと通る。「大きなのもいるんですね。あ、あそこに」と指すと、

「どこに」と藤さんが聞く。しかしそれは写っている影であつた。鮎子はやっぱり小さく上の方に行く。自分は足元の松葉をかき寄せて投げつける。鮎子は響のごとくに沈んで、争い乱れて味噌汁へ逃げこんでしまう。

藤さんが笑う。

手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの鴝かもめは綺麗な鳥ですね」と藤さんがいう。

「あれは鳩じゃありませんか」

「ほほほほ、あれじゃないんですの。あたしね、ほほほほ」

「どうしたんです？」

「いいえ、あたしとんでもないことを思いだしたんですわ」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。——先^{せん}達^{だつて}あたしがこちらへ渡つてくる途中でね、鷗が一匹、小さな枝切れへ棲^{とま}つて、波の上をふわりふわりしていたんですの。ちようど学校なぞにある標本を流したようでしたわ」

自分は気がついたように、海の方を見わたす。はるかの方に地方^{じがた}の山が薄^うつすら見える。小島の蔭に鳥貝^{むがい}を取る船^{ふね}がひと群^{むれ}帆^ほを聯^{つら}ねている。

「ね、鳩が餌を拾うでしょう」と藤さんがいう。

「芝生に何か落ちてるんでしょか」

「あたしがさつき撒まいておいたんです。いつでもあそこへ餌を撒くんです」

「あ、あれは足をどうかしてるようですね」

初やがすたすたとやってくる。紺こんの絆はんてん天てんの上に前垂をしめて、丸く脹ふくれている。

「お嬢さん」

「何？」

「いいや、男のお嬢さんじゃわいの」

「まあ。今お着換えなさるんだわ」

「私がどうした」

「冗談は置いて、あなたは蟹かにを食べなんしたか」

「いつ？」

「ほほほ、鵓のような話ね。——蟹を召しあがれば買ってくるつもりなの？」

「ええ、はあ買うたるのよの。午に煮ようかと思うんでがんさ。はあじきにお午じやけに。——食べなんしたことががんすのかいの」

「食べるけど、あれは厄やっかい介かいなばかりでしかたがないや」

「おいしいものですけれどね」

「それはもうがんすえの。それにこのごろは月がないころじやけになおさらうまいんでがんすわいの。いいえ、ほんとでがんす

て。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびくびくするけに瘦せるんでがんすといの」

村の水天宮様の御威徳を説く時の顔つきである。

「ほほほ」

「おもしろいな、それは」

「そんなら食べなんすか」

「食べるよ」

「じゃ、よかった」と、またあちらへすたすたと、草履の踵かかとへ短い影法師を引いて行く。

鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出てみたくなる。藤さんは一人で座敷で縫物をして
いる。いっしょに浜の方へでも出てみぬかと誘うと、

「そうですね」と、にっこりしたが、何だか躊躇ちゆうちよの色が見え
る。二人で行ったとて誰が咎とがめるものかと思う。

「だってあんまりですから」と、ややあつて言う。

「何が」

「でもたつた今これ始めたばかりですから」

「ついでに仕上げてしまいたいのですか」

「いいえ、そうじゃないのですけど、何だか小母さんにすまない
から。——あたし行きたいんですけれど」

「では行けばいいじゃありませんか」

「そんなことはかまわないんですけどね、あたしこちらへまいつてから、いつも鬱ふさいでばかりいて、何一つろくにお手伝いしたこともないんでしよう」

自分は立膝をして、物尺ものさしを持って針山の針をこつこつ叩いて、順々に少しずつ引っこませていたが、ふと叩きすぎて、一本の針を頭も見えないようにしてしまふ。幸にそれにはちよつとした糸がついていたので、ぐいとその糸を引くと、針はすらりと抜ける。「もう一と月からなるのですのに、ずっと私そんなでしたものですから、今日は気分はいいし、私の方からそう言つて、これを言いつかつたのですのに」

「かまわないや、そんなことは」

「だって女はそうも……」と、針に糸を通す。

自分は素直に立つて、独りで玄関へ下りたが、何だか張合が抜けたようではらくぼんやりと敷居に立っている。

と、

「兄さん」と藤さんが出てくる。

「あそこに水天宮さまが見えてるでしょう。あそこの浜辺に綺麗きれいな貝殻がたくさんありますから、拾っていらつしやいな」という。そんなに勢はずまないのだけれど、もうよそうとも言えないので、干し列べた平莖の中をぶらぶらと出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなたお背せなに綿屑かしら喰っついていますよ」

「どこに？」

「もつと下」

「このへんですか」

「いいえ」

「大きいのですか」

「あ、もうちよつと上」と言い言い出てきて取ってくれる。真綿の切れに赤い絹糸の絡からんだのが喰つついていたのである。藤さんはそれを手で揉もみながら、

「いいお天気ですね」という。いつしよに行つてみたいという念がそぶりに表われている。門を出しなに振り返ると、藤さんはまだうろうろと立っている。

「お早くお帰りなさいましな」

「ええ」と自分は後の事は何んにも知らずに、ステツキを振り廻しながらとことと出て行つたけれど、二人はついにこれが永き別れとなつたのである。

もちろんこの時には、借りた着物はもう着換えていた。着換えるまで自分は何の気もなしにいたけれど、こうして島の宿りに客となつて、女の人の着物を借りて着たのかと思うと、脱ぐ段になつて一種の艶えんな感じが起つた。何だかもう少し着ていたいようにも思われた。そして、しばらく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家なぞでは、こんな花やかな着物を脱ぎ捨ててあることはついに見られない。姉は十一で死んだ。その後家じゆうに

赤い切れなぞは切れつ端もあつたことはない。自分の家は冬枯れの野のようだとつくづくそう思う。そのうちにふと蛇の脱殻ぬげがらが念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るであらうかと、とんでもないことを考えだした時、初やがやってきて、着換えた着物を持って行つた。

今自分は、その蛇が皿を巻いたような丘の小道をぐるぐると下りて行く。一曲りずつ下りるにつれて、女の歌っているのがおいおいに鮮かに聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏とりがないたら起きなされ」と歌う。艶つややかな声である。

「おきて往いなんせ、東が白む。館やかた々やかたの鶏が啼く」と丘を下り

てしまふと、歌うのは角の豆腐屋のお仙である。すべてこの島の女はよく唄を歌う。機はたを織るにも畠を打つにも、舟を漕ぐにも馬を曳くにも、働く時にはいつも歌う。朝から晩まで歌っている。行くところに歌の揚あがらぬことがあれば、そこには若い女がないのである。若い女はみんな歌う。そしてお仙などは一番うまい組のようである。

お仙は外に背中を向けて豆を挽ひいている。野袴をつけた若者が二人、畠の道具を門口へ転がしたまま、黒くろくすぶ燻かまどりの竈しやがの前に踞しゃがんで煙草を喫のんでいる。破れた唐紙の陰には、大黒頭巾を着た爺さんが、火鉢を抱えこんで、人形のように坐っている。真つ白い長い顎あご髯ひげは、豆腐屋の爺さんには洒落しゃれすぎたものである。

「おかしかしかし櫛の葉は白い。今の娘の齒は白い」

お仙は若い者がいるので得意になつて歌つてゐる。家について曲ると、

「青木さんよう」と、呼び止める。人並よりよほど広い額に頭痛膏をべたべたと貼り塞ふさいでゐる。昨夕ゆうべの干潟の鳥のようである。

「昨きん日によう来きなんしたげなの。わしやちようど馬を換えに行つとりましたの」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のもおとなしゆうがんすわいの」と言つたかと思つと、またすぐに歌になる。

「親はたちが二十で子が二十一。どこで算さん用にようが違ちがつたら」

「よい、よい」と野袴はやの一人が囁ささす。

横の馬小屋を覗いてみたが、中に馬はいなかった。馬小屋のはずれから、道の片側を無花果いちじゆくの木が長く続いている。自分はその影を踏んで行く。両方は一段低くなった麦畠である。お仙の歌はおいおいに聞えなくなる。ふと藤さんの事が胸に浮んでくる。藤さんはもう一と月も逗留しているのだと言った。そして毎日鬱ふさぎいでばかりいたと言った。何か訳があるのであろう。昨夜小母ゆうべさんがにわか黙ってしまったのは、眠いからばかりではなかったらしい。どういふことなのであろうかとしきりに考えてみる。

後うしろから鈴の音が来る。自分はわが考えの中で鳴るのかと思う。前から藁わらを背負った男が来る。後で、

「ごめんなんせ」という。振り向くと、馬の鼻が肩のところに覗

いている。小走りに百姓家の軒下へ避ける。そこには土間で機はたを織っている。小声で歌を謡っている。

「おおい」と言つて馬を曳いた男が立ちどまる。藁の男は足早に同じ軒下へ避ける。馬は通り抜ける。蜜柑みかんを積んでいる。

と、

「まあ誰ぞいの」と機を織っていた女が甲走かんばしった声を立てる。

藁の男が入口に立ち塞ふさがつて、自分を見て笑いながら、じりじりとあとしざりをして、背中の藁を中へ押しこめているのである。

「暗いわいの」と女がいうと、

「ふふふ」と男は笑っている。打とけた仲かもしれない。

ふたたび藤さんの事を考えつつ行く。初やは事情を知っている

かもしれぬ。あれに喋しゃべらせてみようかしらと思う。

このあたりはすべて漁師りょうしの住居である。赤ん坊を竹籠へ入れて、軒へぶらぶら釣り下げて、時々手を挙げて突きながら、網の破れをかがっている女房がある。縁先の蓆むしろに広げた切芋へ、蠅が真つ黒たかに集つて、まるで蠅を干したようになっていがあるのがある。だけれど、初やに聞くというのは、何だか、小母さんが言わないでいることを蔭へ廻つて探るようである。聞くまい。知れる時には知れるのだ。自分はなぜこんなに藤さんの事を気にするのであろう。たんに好奇心というにすぎないのであろうか。

この時自分は、浜つつみの堤の両側に背丈よりも高い枯かれすすき薄すきまが透間すきまもなく生え続いた中を行く。浪がひたひたと石崖いしがけに当る。ほど

経て横手からお長が白馬を曳いて上つてきた。何やら丸い物を運ぶのだと手真似で言つて、いつしよに行かぬかと言うのである。

自分について行く気になる。馬の腹がざわざわと薄の葉を撫なでる。

そこを出ると水天宮の社やしろである。あとで考えると、このへんで引き返しさえしたらよかつたのに、自分はいつまでも馬の臀しりについて、山畠を五つも六つも越えて、とうとお長の行くところまで行つたのであつた。谷合いの畠にお長の双ふた親おやと兄の常吉がいた。二三寸延びた麦の間の馬鈴薯を掘つていたのである。

「まあ、よう来てくれなんしたいの」と言つてみんなで喜ぶ。爺さんは顔じゆうを皺しわにして、

「わしらはあんたが往いんなんしたあと、いつまでもあんたの事ば

かり話していたんぞ」とにこにこする。

「はあ死ぬまで会われんのかいと思うたに」と母親が言う。自分は小さい時の乳母にでも会ったような心持がする。しばらくいろいろの話をする。

やがて双た親は掘りはじめる。枯れ萎れた茎の根へ、ぐいと一と鍬くわ入れて引き起すと、その中にちらりと猿の臀くわのような色が覗く。茎を掴んで引き抜くと、下に芋が赤く重なってついている。

常吉はうしろからぽきぽきとそれをもぎ取って畚かごへ入れる。一と畚溜かごればうんと引つ抱えて、畦くろに放した馬の両腹の、網の袋へうつしこむ。馬は畠へ影を投げて笹の葉を喰っている。自分はお長と並んで、畠の隅の蓆の上で煙草を吹かす。双た親は鍬を休める

たびごとには自分の方を向いて話しをする。お長も時々袖を引いて手真似で話す。沖の鳥貝を搔く船を指して、どの船も帆を三つずつ横向きにかけている。両端から二本の碇いかりづな綱を延しているゆえ、帆に風を孕はらんでも船は動かない。帆が張っているから碇綱は弛ゆるまぬ。鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなどと言う。浪が畠の下の崖に砕くだける。日向ひなたがもくもくと頭の髪に浸みる。

やがて常吉の若い嫁が、赤い馬を引いてやってくる。その馬が豆腐屋のであつた。嫁も掘る。自分も掘ってみたいと言つたけれど、着物がよごれるからだめだと言つて母親が聞かない。嫁は唄を謡う。母親も小声で謡う。謡えぬお長は俯うつ伏ぶして蓆の端むしを眺むつている。

常吉が手を叩くと、お長は立って、白馬を引いて行く。網の袋には馬鈴薯がいっぱいになっている。白馬が帰ってくると、嫁の赤馬が出て行く。赤が帰ると白が出る。

「父とうやん、はあ止やめにしなんせ」と常吉が鉢はちまき巻を取った時には、もう馬の影も地に写らなかつた。自分は何時間おつたか知らぬ。鳥貝の白帆もとくにいなくなっている。

「旦那は先い往いんなんせ。お初やんが尋ねに出ましように」と母親がいう。自分は初めて貝殻の事を思いだして、そこそこに水天宮のところまで帰ってくる。

夕日がはるか向いの島蔭に沈みかかっている。貝殻はもう止そうかしらと思つたが、何だか気がすまぬゆえ、せめて三つ四つば

かりでもと思つて干潟へ下りる。嫁の皿という貝殻がたくさんころがっている。拾いだすとなかなか止められない。とうと片つ方の袂たもとへおおかたいっぱいになるまで拾う。

上へ上つてみると、自分の歩いた下駄の跡あとが、居坐つた二つの漁りようせん船の間にうねすねと二筋に続いている。帰つたら藤さんが

一番に出てきて、まあ何をしておいでになつたんですと言うであらう。そして貝殻を玄関へうつしだすと、おやたくさんにまあと言つて嬉しそうにするであらう。自分はそれをもうあつたことのように考え浮べながら、袂を抱えて小早に帰る。豆腐屋の前まで来ると、お仙が門口でカンテラへ油をさしていた。

丘を上る途中で、今朝買わせたばかりの下駄なのに、ぷすり前

鼻緒が切れる。元が安物で脆弱ひよわいからであろうけれど、初やなぞに言わせると、何か厭なことがある前徴である。しかたがないから、片足袋ぬいで、半分跣足はだしになる。

家へ帰ると、戸口から藤さん呼びかけて、しばらく玄関にうろついていたが、何の返事もない。もう一度高く呼んで、今度は小母さんと言ってみたがやつぱり返事がない。家じゆうがしんとして、自分の声のはいって行く跡が見えるようである。勝手に廻って初やを呼んでも初やもいない。変だと思しながら、あり合せの下駄を提さげて井戸端へ出て、足を洗おうとしていると、誰かしら障子の内でしくしくと噉すすり泣きをしている。障子を開けてみると章坊である。足を投げ出してしょんぼりしている。

「どうしたんだ」と問えど、返事もしないでただ涙を払う。

「お母さんはいないの？」と言えど顔を横に振る。

「いるの？」と言えどやっぱり横に振る。

「どうしたんだ。姉さんはどこへ行ったんだい？」と聞くと、章坊は涙の目を見張って、

「姉さんはもう帰っちゃったんだもの」と泣きだすのである。

「おや、いつ？」

「よその伯父さんが連れに来たんだ」

「どんな伯父さんが」

「よその伯父さんだよ」と涙を啜る。

自分は深い谷底へ一人取残されたような心持がする。藤さんは

にわかまに荷物を纏めて帰って行つたといふのである。その伯父さんといふのはだ**い**ぶ年の入つた、鼻の先に痘痕あはたがちよぼちよぼある人だといふ。小母さんも初やもいっしよに隣村の埠頭場はとばまでついて行つたのださうである。夕方の船はこの村からは出ないのである。初やは大おきな風呂敷包みを背負つて行つた。も少し先のこ**と**だといふ。その伯父さんは章坊が学校から帰つたらもう来ていたといふのである。自分は藤さんの身の事情が、いろいろに廻り灯籠とうろうの影のように想像の中を廻る。今埠頭場まで駈けつけたら、船はまだ出ないうちかもしれない。隣村の真ん中までは二十町ぐら**い**はあるうけれど、どこかの百姓馬を飛ばせば訳はない。何だか会つて一ひと**こと**言別れがしたいようである。このままでは物足

りない。欺だまされでもしたようにあつけない。駈けつけてみようかしらと思うけれど、考えると、その伴れに來た人間に顔を見られるのが厭である。何だか無性に人相のよくない人間のようない気がしてならない。それが怪しげな眼つきをしてじろじろと白眼にらみでもすると厭である。また船が出た後であつては間抜けている。そして小母さんに自分などは來なくてもいいのと思われると何だかきまりが悪い。こう思つて決心がつかない。しばらくぼんやりと立つて、その伯父さんの顔を考えてみる。これまで見たことのある厭な意地くねの悪い顔をいろいろ取りだして、白髪かつらの鬢かの下へ嵌はめて、鼻あばたへ痘痕を振つてみる。

やがて自分はこのこと物置の方へ行つて、そこから稻妻の形

に山へついた切道を、すたすたと片^{かたはだし}跣足のままで駈け上る。高みに立てば沖がずっと見えるのである。そして、隣村の埠頭場から出る帆があれば、それが藤さんの船だと思つたからである。上^{あが}れるだけ一足でも高く、境に繞^{めぐ}らす竹垣の根まで、雑木の中をむりやりに上つて、小松の幹を捉^{つかま}えて息を吐く。

白帆が見える。池のごとくに澄みきつた黄^{たそがれ}昏の海に、白帆が一つ、動くともなく浮いている。藤さんの船に違いない。帆のない船はみんな漁^{りようせん}船である。藤さんが何か考えこんで斜^{はすかい}に坐つているところが想われる。伴れに來た人は何にも言わないで、鼻の痘痕を小指の爪でせせくつて坐つていような気がする。藤さんはどんな心持がしているであろう。どういうことからこんなに

不意に伴れて行かれたのであろうか。小母さんのところに一と月もいたのはどうしたゆえであろうかと、いろんなことが一度に考えられて、物足りないような、いらだたしい心持がする。船から隣村の岸までは、目で見てもここからこの前の岸までよりかはるかに遠いけれど、まだ一里と乗りだしてはいない。自分が畑に永くいさえしなかつたら、少くとも藤さんが出かけるところへなりと帰ってきたであろうに。それともなぜはじめから出て行くのを止さなかつたらう。いっしょにいる間は別に何とも思わなかつたけれど、こうなってみれば、自分は何かしらあなたをいじらしく思うとくらは言っておきたかのような気がする。このままで永く別れてしまうのは何だか物足りない。自分がどんな気にいる

かは藤さんは知ってはいまい。別れた後は元の知らぬ人と考えているように思っていてくれては張合がない。自分は何だかお前さんの事が案じられてならないのである。

このあたりの見渡しは、この時のみは何やら意味があるようであつた。暮れて行く空や水や、ありやなしやの小島の影や、山や蜜柑畑や、森や家々や、目に見るものがことごとく、藤さんの白帆が私語ささやく言葉を取り取りに自分に伝えているような気がする。

と、ふと思わぬところにもう一つ白帆がある。かなたの山の曲り角に、靄もやに薄れて白帆が行く。目の迷いかと眸ひとみを凝こらしたが、やっぱり帆である。しかし藤さんの船はぜひと前からの白帆と定めたい。遠い分はよく見えぬ。そして、間もなく靄の中に消え

てしまうのである。よく見えて永く消えないのが藤さんの船でなければならぬ。

はらはらと風もないのに松葉が降る。方々の機はたの音が遠くの虫を聞くようである。自分は足もとのわが宿を見下す。宿は小鳥の逃げた空籠のようである。離れの屋根には木の葉が一面に積って朽くちている。物置の屋根裏で鳩がぼうぼうと啼ないている。目の前の枯枝から女郎蜘蛛じょろうくぐもが下る。手を上げて祓はらい落そうとすると、蜘蛛はすらすらと枝へ帰る。この時袂たもとの貝殻ががさと鳴る。今までとんと忘れていたけれど、もうこの貝殻も持っていたってつまらないと思つて、一つずつ出しては離れの屋根を目がけて投げつける。屋根へ届くのは一つもない。みんな途中へ落ちる。落ちて木

の葉が幽かすかに鳴る。今のは何とも答がなかったと思うと、しばらくして思いだしたようにばさというのがある。目を閉じて横の方へうんと投げて、どの見当で音がするか当ててみる。しななければならないまで投げる。しまいには三つも四つも握にぎつてむちやくちやに投げる。とうとう袂の底には、からからの藻草の切れと小砂とが残ったばかりである。

ふたたび白帆を見る。藤さんのはいつまでも一つとところにいる。遠くの方はもう亡くなっている。そして、近く岸の薄すすきのはずれにこちらへ帰る帆がまた一つある。どこから帰ったのかとはじめは訝いぶかしむ。そのうちに、これは一番はじめのがこちらへ近づいたのではあるまいかと疑う。みるみる岸に近くなる。それでは藤さん

の船だと思つたのは、こちらへ帰る船ではなかつたらうか。今の藤さんの船は、霧の中のがこちらへ出てきたのではあるまいか。自分はわが説が嘲りあざけの中に退けられたように不快を感じる。もしかなたの帆も同じくこちらへ帰るのだとすると、実際の藤さんの船はどれであらう。あちらへ出るのには今の場合は帆が利かぬわけである。けれども帆のない船であちらへ行くのは一つもない。右から左へ、左から右へと隈くまなく探しても一つもない。自分は気がいらだつてくる。それでは先に霧の中へ隠れたのが藤さんのだ。そしてもう山を曲つて、今は地方じがたの岬を望んで走っているのである。それに極きめねば収まりがつかない。むりでもそれに違いない、と権柄けんべいずくで自説を貫つらぬいて、こそこそと山を下おりはじめぬ。

下りる途中に、先に投げた貝殻が道へぽつぽつ落ちてゐる。綺麗な貝殻だから、未練にもまた拾って行きたくなる。あるだけは残らず拾ったけれどやっと、片手に充ちるほどしかない。

下りてみると章坊が淋しそうに山羊の檻やぎおりを覗いて立っている。

「兄さんどこへ行つたの」と聞く。

「おい、貝殻をやるうか章坊」というと、素気なくいらないう。

私は不意に帰らねばならぬことと相なり候。わけは後でお聞きなされることと存候。容易にはまたとお目もじも叶かなうまじと存ぜられ候。あなたさまはいつまでも私のお兄さまにておわし候。静かに御養生なされ候ようお祈り申しあげ候。おもの

も申さで立ち候こと本意ほいなき限りに存じまいらせ候。なにとぞお許しくだされたく候。

これは足を洗いながら自分が胸の中で書いた手紙である。そして実際にこんな手紙が残してあるかもしれないと思う。出ようとする間ぎわに、藤さんはとんとんと離れへはいつて行つて、急いで一と筆さらさらと書く。母家おもやで藤さんと呼ぶ。はいと言いいい、あらあらかしくと書きおさめて、硯すずりの蓋を重しに置いて出て行く。——自分が藤さんなら、こんな時にはぜひと何か書き残しておく。行つてみれば実際何か机の上に残してあるかもしれないという気がする。

しかしやっぱりそんな手紙はなかった。

けれども、ふと机の抽斗ひきだしを開けてみると、中から思わぬ物が出てきた。緋ひの紋羽二重に紅絹裏もみのついた、一尺八寸の襦袢じゅばんの片袖が、八つに畳んで抽斗の奥に突っ込んであつた。もとより始めは奇怪なことだと合点が行かなかつた。別に証拠といつてはないのだから、それが、藤さんがひそかに自分に残した形見であるとは容易に信じられるわけもない。しかし抽斗は今朝初やに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初やや、そんな二三十年前の若い女に今ごろこんな花やかな物があるはずがない。はたして藤さんが入れたのだとは断言できぬけれど、しかしほかのものがどう間違つたつてこ

んな物を自分の抽斗へ入れこむわけがない。藤さんのしたことに極^{きま}っている。そうすればただうっかり無意味で入れたのではない。心あつて自分にくれたのである。そう推定したってむりとは言えない。自分は袖を翳^{かざ}して何だかほろりとなった。

しかし自分は藤さんについてはついこれだけしか知らないのである。ああして不意に帰ったのはどういう訳であつたのか、それさえとうと聞かないで済んであつた。その後どこにどうしているのか、それも知らない。何にも知らない。

というところと合点が行かぬかもしれぬけれど、それは自分がわざわざ心配してこんな風にしてしまったのである。千鳥の話が大切なからである。千鳥の話とは、唾^{おし}のお長の手枕にはじまつ

て、絵に描いた女が自分に近よつて、狐が鼬いたちほどになつて、更紗の蒲団の花が淀んで、鮒ふなが沈んで針が埋うずまつて、下駄の緒おが切れて女郎蜘蛛が下つて、それから机の抽斗から片袖が出た、その二日の記憶である。自分は袖を膝の上に乗せたまま、暗くなるまでじつと坐つていろいろな思いにくれた末、一番しまいにこう考えた。話はただこの二日で終らなければおもしろくない。跡へ尾を曳いてはもうつまらないと考えた。ある西の国の小島の宿りにて、名を藤さんという若い女に会つた。女は水よりも淡き二日の語らいに、片袖を形見に残して知らぬ間にいなくなつてしまつた。去つてどうしたのか分らぬ。それでたくさんである。何事も二日に現れた以外に聞かぬ方がいい。もしやよけいなことを聞いたりし

て、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷がついては惜しいわけである。こう思ったから自分はその夕方、小母さんや初やなどに会うのが気になった。二人が何とか藤さんの身の上を語って、千鳥の話こわを壊しはしまいかと気もめた。

小母さんは帰ってくるやいなや、

「あなたお腹なかがすいたでしょう。私気になって急いで帰ったのでしたけど」と、初やにお菜さいの指図をして、

「これから当分は何だかさびしいでしょうね。まったく不意にこんなことになったのですよ」と、そろそろ何か言いだしそうであったから、自分はすぐ、

「あの豆腐屋の親爺さんは、どういう気であんなに髯ひげを生やして

いるんでしよう。長い髯ですな」と言つて、話の芽を枯らしてしまつた。

それ以来小母さんたちがちよつとでも藤さんの事を言いだすと、自分はたちまち二日の記憶を抱いて遁^にげて行くのであつた。どんな場合でもすぐ遁げる。どうしても遁げられない時には、一生懸命にほかのことを心の中で考え続けて、話は少しも耳へ入れぬようにしていた。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けていっさい自分の前では言わなくなつた。初やも言い含められでもしたのか、妙に藤さんの名さえも口に出さなかつた。二人で何とか考へての事かもしれないと思つたが、そんなことはどうでもよかつた。聞かされさえしなければいいのである。その後小母さん

からよこす手紙にも、いつでも自分がいたころの事をあれこれ回想していながら、今に藤さんの話は垢ほども書いてはこない。

以来永く藤さんの事は少しも思わない。よく思うのは思うけれど、それは藤さんを思うのではない。千鳥の話の中の藤さんを思うのである。今でも時々あの袖を出してみることもある。寝つかれぬ宵なぞにはかならず出してみる。この袖を見るには夜も更けぬとおもしろくない。更けて自分は袖の両方の角を摘つまんで、腕を斜に挙げて灯ともし火の前に釣つるす。赤い袖の色に灯影が浸みわたつて、真中に焰が曇るとき、自分はそぞろに千鳥の話の中へはいつて、藤さんといっしょに活動写真のように動く。自分の芝居を自分で見るのである。始めから終りまで千鳥の話を詳くわしく見てしま

うまでは、翳^{かざ}す両手のくたぶれるのも知らぬ。袖を畳むとこう思う。この袂^{たもと}の中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分とが、いつまでも老いずに封じてあるのだと思う。藤さんは現在どこでどうしていてもかまわぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでももありありとこの中に見ることができる。

千鳥千鳥とよくいうのは、その紋羽二重の紋柄である。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集18 鈴木三重吉 森田草平集」集英社

1969（昭和44）年9月12日発行

初出：「ホトトギス」

1906（明治39）年5月

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2005年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

千鳥

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>